

よびごえ

VOL, 138

因速寺機関誌



美しいアジサイの花を見たとき、「もう済んだ」ということは一つもないと思った。目の前のアジサイは、去年、咲いた花ではない。いま目の前にしている花は、へいまだけに生きている。武者小路実篤むしやのこうじさねあつさんは「人見るもよし 人見ざるもよし 我は咲く也」と書いた。人間の関心は、いつも「ひとの目」だ。でも、そんなものを気にしていない花の、なんと清々すがすがしくも凛々りんりしい姿か、と感動されたのだろう。花一つを見ても、「済んだこと」は一つもない。本当は、アジサイには、アジサイという名前はない。アジサイが「私はアジサイと申すものです」と名のつたアジサイはいないはずだ。つまり、あの花をアジサイと名づけたのは、人間以外の何ものでもない。人間が選別し、認識し易いためにレッテルを貼っただけ。これは根源的差別だ。だから、「本当のアジサイ」を人間は見えてはいない。「あの花はアジサイだ」と知った途端に、「本当のアジサイ」ではなく「アジサイという観念」を見てしまう。「観念」にしてしまえば、「もう済んだ」ことになる。この「アジサイ」という観念を食い破って、「本当のアジサイ」が顔を出す。その顔は「不可称不可説不可思議」の顔だ。決して、人間には本当の顔を見せないぞ！と叫んでいる鉄壁てつぺきの顔だ。

なぜ知らないひとの 法事をするのですか？

武田 釋定光（住職）
しやくべいどうこう

■意識は知らないけれども、身体は知っている■

ある方から、こんな質問を受けた。「おじいさんの法事のご案内をもらったのですが、私は孫に当たります。私はおじいさんとは会ったことはないのですが、会ったことのないひとの法事をしなければならぬのですか？」と。

ひと昔前には、このような質問を受けることがなかったが、さすがに、現代だと思った。「〇〇家」を重んじるという風習は、確かに風化しつつある。

それで私は、こう答えた。「そうですね。確かに貴方はおじいさんを知りませんよね。貴方が生まれる前におじいさんは亡くなっているのですから。しかし、貴方の『思い』は知らなくても、貴方の『身体』は、ものすごくよく知っているのではないですか。」と。

そのかたは怪訝けげんな顔をされたので、なぜ「身体」が知っているのかを説明した。「貴方は両親から生まれたんでしょう。」「そうですね。」「でも、その両親も、それぞれに両親がありました

よね。つまり、貴方には四人のおじいさんとおばあさんがいたわけです。これは貴方だけのことでありませんよ。人間は誰しも、四人のおじいさんとおばあさんがいるのです。それを溯さかのぼれば、四人が生まれるためには、八人。八人が生まれるためには十六人が必要です。十代溯れば、千二十四人ですし、三十代溯れば十億三千万人以上になります。これは驚くべき数字ですね。

でもこの数字は架空の数字ではないのです。〈真実〉の数字です。そうしますと、そのうちの、もし一人でも存在していなければ、あなたは、いま、ここにはいないのです。貴方が貴方として、いま、ここにこうしてあることは奇跡じやないですか。

貴方の意識では知らないけれども、知っているとか知らないと言うよりも、もっと身近な存在でしょう。貴方は、おじいさんのDNAでも出来上がっているのですからね。

こうやっていのちの不思議さ、尊さについて考えるために法事はあるのですよ。」

多少の脚色はあるが、そのようなお話になった。さらに言えば、自分の先祖を、そのように溯ると、三十三代前の人口は地球上の全人口を超えてしまう。こうなると、バイデンさんやプーチンさんとも、昔は親戚だったことが暴かれてしまう。それが、ただか三十三代前のことなのだ。いのちは、人間が考える以上に密接につながり合い、絡み合っている。こうなると、「戦争」とは身内同士の争いで、とても愚かなことをしているなあと、考え直してくれないだろうか、と思いたくなる。

■人間以外の生き物には「生」も「死」も存在しない

法事は、いのちの成り立ちばかりではない。故人が身をもって

教えてくれた「死」についても、思いを馳せることだ。つまり、それは、自分もまた故人と同じように「死ぬ存在」であり、そのことを学ぶ場所でもあるということだ。

大田南畝（江戸期の狂歌師）は「今までは人のことだと思ふたに俺が死ぬとはこいつはたまらん」と辞世の句を残している。大人になれば、誰でも死ぬことくらいは察しがつく。しかし、それはどこまでも「他人事」でしかなく、自分自身のこととは思えない。

それが〈自分〉のことだと思ってみるところから〈真・宗〉は始まる。なぜ、そんなややこしいことを考えなければならぬのだろうか。何もひとの嫌がる「死」など考えなくてもよさそうなものなのに。

実は、それは、あなたを、「死という観念」から解放するためなのだ。「死」は「客観的なもの」ではない。だから人間以外の生き物には「死」は存在しない。人間以外の生き物は、「死」を知らない。「死」を知らないから淡々といまを生きている。「死」を知らないということは、その反対にある「生」も知らないのだ。つまり、人間以外の生き物には「死」も「生」も存在しないのだ。

なぜ人間以外の生き物が「死」んでるように見えるのかと言えば、それは人間が「死という観念」を投影しているからだ。あくまで、人間の見方を投影して、鳥は「死」んでいる、魚は「死」んでいると言っているに過ぎない。

そうなっていると、「死」と「生」は、どこまでいっても、人間にしか存在しない「特殊な意味」だと暴き出される。

■〈真・宗〉は「死という観念」からの解放

もっと詳細に「死」を見ていくと、「死」とは、二人称・三人称にしか存在しない。「一人称の死」は体験できない。自分が「死」を体験するときには、「これが死だ」と感じ取る器官そのものが停止しているのだから、知ることはできない。芸能人や身内の「死」を見て、「これが死だ」と思っているだけに過ぎない。だから、「死という観念」を「死」だと錯覚しているのだ。

〈真・宗〉は、そうやって「死」が生理的なものでも、客観的なものでもなく、「観念」にしか過ぎないと教えて解放する。

それを親鸞聖人は、「往生」という仏教語で言い表そうとした。「往生」とは、「死」んでから浄土に往く教えではないし、地獄へ往く教えでもない。死後の世界などへの関心から、「いま」解放されることだ。それを『歎異抄』（第十六条）では「往生は弥陀に、はからわれまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず」と言っている。「死後の世界」が観念ならば、「死後の世界」への関心も、丸ごと阿弥陀さんにまかせてしまいなさい、所詮、私が云々できることではないから、という意味だ。

小林一茶の言う、「ともかくもあなたまかせの年の暮れ」の「あなた」とは、阿弥陀さんのことだ。生まれたいと願って生まれたひとは、誰もいない。誕生そのものも、阿弥陀さんの仕業だ。〈いま〉生きているのも阿弥陀さんの仕業であれば、やがて来る「臨終」も阿弥陀さんの仕業であるに違いない。

私たちにできることは、阿弥陀さんにおまかせすることだけだ。おまかせとは、「無責任」などではなく、全人類の罪と一つに溶け合うことだ。全人類の典型としての自己を得ることなのだ。

お正信偈しょうしんげが

美しい

輪っかで

つながった証明

阿部ふさ（山形田園蝶舞でんえんちょうぶばあば）

ばあばは、これまでタマゲル（驚く）こと多々経験あり。それが八十になっても、まだあった。びっくりタマゲルことがとてもなく嬉しいことだったので、たくさんの皆様方にお伝えしたくなりました。

事の始まりが、ちょっとあります。

ばあばは、生きることの苦の最中にあった若い頃、たまたま誘われて山形教務所にお話を聞きに行きました。お話を聞けば賢くなつて辛いことなどなくなるかな。が、しかし聞いても聞いても決してなくなることはなく、いつしか足が遠のいていました。

生きる為の苦悩の続く中、思わぬ出遇いが多くあり、それは大きな学びを頂くことになりました。時折、ふと心に甦るお言葉がありました。教務所で、何時のことだったか、どんなご講師の先生のお話だったか、ぼんやりとした記憶の中から浮かんできました。

「出遇いとは不思議なもの。人は出遇いによって学んでいくもの。たまたまは偶然、偶然の出遇いだったとしても、偶然の偶ぐうは、『出遇いの遇う』に通じる。歴史的に出遇うべき出遇いなり。」

長い時が流れ、老いの暮らしの中の、ある日、教務所で聞法をされている方からの、突然のお誘い。不思議な思いにかられるも、再び教務所での聞法の暮らしになりました。若い日、お遇いした方々は一人もいらつしやいませんでした。

六年前の十月、尾花沢・念通寺ねんつうじ様で、東京因速寺様ご住職のご法話の会へお誘いを頂くも、初めてのことで、いつも隣りに座り、笑顔でご挨拶をして下さる森孝司もりこうじさんからでしたので、出かけることにしました。それから次の年の四月と十月に、同じ念通寺様でのご法話の会に参加。年が明けると、間もなくコロナで何処へも出掛けることとなりました。

ここからが本題のびっくりタマゲル嬉しいお話です。初めて因速寺様ご住職武田定光先生のご法話をお聞きし、帰りに先生の多くの著書の中から『救済詩抄』を求めました。ページを開くと、エッと驚くお言葉ばかり。それまで少々の仏教書は読んできましたが、余りの違いに驚き、胸につかえたものが、一度に吐き出されたような思いで、大粒の涙ポロポロ。我が涙がこれほどこぼれるのが不思議に思うくらい。止めどもなく流れました。お恥ずかしくも先生にお手紙を差し上げました。

そうこうしたある日、坊守様ぼうもりより因速寺様で独自に出されているお正信偈の写経本を頂戴しました。その頃、難病の女性の話し相手を引き受けていました。その女性が還暦を迎えるからと、生家の愛知県田原市から、ご家族が来られて、お母様とたまたまの話から、同じ門徒とわかり、話が弾みました。そして、間もなく女性のお祝いに来たお兄様が亡くなりました。また、女性も寝たきりに、九十を越えたお母様は女性の妹様に介助され、車椅子で

遇いに来ました。意識の定かでない娘を、何度も名前を呼び、手を握る母の姿を、ただ見入るばかりでした。

確か帰り際だったか、坊守様より頂戴したお正信偈写経本をお上げしました。時を経ずして、女性は亡くなりました。その後、女性の三回忌が執り行われるという、少し前の七月、坊守様から頂戴した写経本を書き終えたからと妹様から送られてきました。お手紙には、「母が楽しく経本を書きました。母の書いたものを見てあげて下さい」と。お母様のお手紙には、「うまくは書けなかったけれど、私と思って下さい。九十二歳。老いて頼りの息子、かわいがった娘に先立たれた母親。息子の家族に負担を掛けまいと、施設に入所」。悲しみの深さは計り知れず、胸が痛みました。

ある日の電話で、「暇だからね、家のお寺様にたのんで、ご本山からお正信偈の写経本を取り寄せてもらい、書いてるよ」と嬉しい張りのある声。驚くやら、反対に励まされました。何時からか月に一度の葉書に、話し相手をしていた時の様子。山形の情景等をお知らせするようになり、すると必ず電話で、「写経が楽しくて、毎日書いてるよ、親戚知人に貰ってもらうが、まだあるの。家のお寺様に納めさせてもらったの。もうすぐ百冊達成だよ」。エーッ、タマゲタよ、ほんとうに楽しそうな声。お父さんとお兄さんの法事では、写経したお正信偈本で、皆でお勤めしたの、とどんなにどんなに嬉しかったか。「もう少しあるので、もらって下さい」と十五冊届きました。九十五歳の施設での暮らしを写経という日々で過ごした女性の大先輩に乾杯。深々と頭が下りました。老いの暮らしの中に、写経との出遇いがあったことを感謝でございます。

先生の著書、『〈真実〉のデッサンⅣ』（二〇頁）に「親鸞も、『たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ』と。『たまたま』とは言わば『偶然』だが、『遠く宿縁を慶べ』は永遠の過去からの必然性を慶べと言っている。」エーッ、若い日に教務所でお聞きしたお言葉だった。遠いご先祖が我をして歩ませし道。振り返ればひとつも途切れることなく繋がっている今。学びのご縁でございました。

田原の九十五歳の女性も、また先祖の宿縁によって、百冊の書写達成に至り、これも尚、繋がったご縁。我をして因速寺様坊守・武田美輪様の一冊のお正信偈写経本が東京↓山形↓愛知県田原まで繋がって百冊になりました。「遠く宿縁を慶べ」であり、これこそが永遠の過去からの必然性が、慶びとなつて証明されたと思いました。

届いた十五冊の写経本は、十二冊を因速寺様に、ご縁を繋いで下さった第一の人・森孝司様の寺・新庄市無量寺様、武田先生の著書はほとんど読まれているという東根・正福寺様に一冊ずつ納めさせて頂きました。ばあばも一冊。ばあばは八十です。過ぎ越し歩んだ道が、間違いなく安心の白い道であつたと確信する出遇いでございました。

深い感謝をこめて繋いで下さったご縁に合掌。お恥ずかしい拙い文章でございました。ばあばのビックリタマゲルほど嬉しかったお話のお知らせでございました。

■ばあば（阿部さん）とは、数年前に、山形（尾花沢）でお会いました。それ以来、徐々に関係が深まり、毎朝、スマホで「＼＼」をもらう関係になった。必ず、朝の五時過ぎには「＼＼」が来る。旦那の

介護をしながら、日々の山形の自然などを写真入りで伝えてくれる。東京に居ながら、山形の自然を呼吸している。このごろは、田植えも終り、夜の帳が降りると、田んぼからカエルの大合唱が聞こえるそう。波瀾万丈の人生を歩んでこられたが、彼女を取り巻く「ご縁」の広さに驚嘆する。ここにも書かれているように、お知り合いの老女（金田幸子さん）が、「正信偈」の写経を、なんと百冊もされたという。それが拙寺の坊守の差し上げた一冊の「正信偈」がきっかけとなったそう。何を思っただけで彼女は「正信偈」を書写されていたのだろうか。そこには、阿弥陀さんが寄り添っておられたに違いない。そういう阿部さんも、なんと『真宗聖典』を、全文ノートに書写された凄い方だ。一字一字、書写することで、内面への階段を一段一段降りていく。そして阿弥陀さんとコソコソ密会する。こんな楽しみは、味わった者にしか分かるまい。また、今朝も、「ZEN」が届く。存在証明のように。

住職



金田幸子さんが書かれた百冊の「正信偈」書写本の一部です。

ハワイとお寺

白井 義弘（渋谷区）

現在、私は定年退職して「のんびり」、いや「ドタバタ」と年金生活を送っております。ただいま我が家には、ハワイ好きの妻と五匹のワガママ猫が居ります。支給される「雀の年金」は、猫たちの餌代とトイレ代に消え去ります。私は決して猫オタクではありませんが、縁あって彼らと同じ時代を共有しております。

さて、私が定年前に何をしていたかと言うと、「日本語学校」の理事と校長を兼任しておりました。その当時、私の先輩が、米国ハワイ大学で文化人類学の教鞭をとっておられたのですが、その方から、「君の学校でも、ハワイ大学の日本語授業をやっているか？」とお誘いを受けました。私の学校では、外国人の日本語教育以外に「日本語教師の育成」を行っておりました。その一環として、ハワイ大学・日本語学科で教育実習をさせて頂くことになったのです。ハワイ大学は州立大学ですので、アメリカ全土の学生以外にも全世界の人々が留学生として来ています。日本語学科の学生たちは、初級・中級・上級と十数クラスに別れ日本語学習を行っております。大変なのは、ハワイでは、教室以外に日本語を使う環境がないことです。また日本語学習者は全て外国人（私たちから見ても）なのですが、何故か皆、大人しくて恥ずかし

がり屋ばかりです。（日本語を勉強していると、性格も日本人に似てくるのでしょうか？）ハワイ大学マノア校は、山の麓全体がキャンパスという、自然に恵まれた環境なので植物園の中に校舎があるようです。皆さんがハワイに行かれて時間が空いていたら、ハワイ大学に散策に行くことをお勧めします。

そして、私とハワイのお寺とのご縁は、ハワイ出張時に現地の日系人の方から、「この度、ハワイのお寺のご住職が『文科大臣賞を授与された』」ということで、ご紹介を受けたことから始まりました。このご住職は、とても気さくな方で、いつも作務衣姿で「私は、福島の百姓です」とおっしゃっていました。ところが、日本でお会いしてびっくり！親鸞聖人ともゆかりのある古いご宗旨の大僧正、お偉いさんだったのです。そのご住職から、「子どもたちに日本語を教えているお寺があるので紹介します」と案内されたのが浄土真宗のお寺だったのです。

そのお寺の姿は実に美しく、石造りで真っ白な大寺院が威風堂々とそびえ立っておりました。パリ・ハイウェイからも臨むことができ、私は、アメリカの戦前のニュース映画で観たことがありました。そのお寺は、幼稚園、小学校、中学校を運営しており、日系人五世、六世や様々な民族を先祖に持つ子どもたち（ハワイは移民の島）が、勉強していました。生徒たちは、とても聞き分けが良く、礼儀正しいので驚きました。アメリカの普通授業の後に日本語教育を行うのですが、授業開始前は、皆で「感謝の言葉」を述べ、授業後も、「感謝の言葉とお念仏」を唱和します。子どもたちに言葉を教えるのは難しく、大人と違って、つまらないとそっぽを向いてしまいますので、関心を引きつけながら授業

をするのは大変なことです。また校長先生も他の先生方も、たいへん教育熱心で子どもたちに教えることに矜持きやうじを持った素晴らしい方々でした。

ハワイのお寺と日系人の関係は古く、明治元年（一八六八年）には、日本人移民第一陣が、ハワイのプランテーション労働力として渡航しています。その後、日本のありとあらゆる宗教が海を渡りました。当時、ハワイは独立王国で、カラカウア大王も明治天皇に謁見えっけんするために来日しております。現在、ハワイの日系人の人口比率は、二〇数%ですが、戦前はハワイの人口の約三分の二が、日系人という時代がありました。そして、ハワイのお寺は日系人の関係との絆が強く、日系人コミュニティの形成や、ハワイの政治や経済に於ける日系人の役割をお寺が応援してきました。また、お寺どうしの関係も強く、宗派に関係なく、皆仲良く交流しているのです。毎年行われる「メモリアルデー（戦没者追悼記念日）」には、各宗派が交代で主催し、他の宗派が後援をします。会場であるアラモアナパークは、毎年数万の人々が参加して大法要が執り行われます。西の海に沈む太陽に向かって行われる大法事は、それはもう圧巻です。

そして、ハワイのお寺が興味深いのは、（キリスト教の日曜学校のように）毎日曜日に門徒さんや関係者が集まり、当たり前ですが、英語でのご法話を聴聞して、皆で持ち寄った手作りのランチやスウィーツを食べ、おしゃべりをして、自分の財布事情に応じて、五ドル、十ドル、二十ドルとお寺に寄進して帰るのです。そこでも、お寺と門徒さんの信頼関係の強さを感じました。

また、毎夏に境内で行われる盆ダンス大会（盆踊り）の光景は

とても不思議です。中央にやぐらを立て、日本と同じ盆踊り曲をかけ、やぐらの周りで皆踊るのは日本と同じなのですが、ただ違うのは、浴衣やアロハシャツ、Tシャツを着て踊る人々の人種が種々様々なのです。肌の色が黄色い人、白い人、黒い人、褐色の人、みんな一心になって踊っています。これはハワイのお寺がいろいろな民族出身の人たちから、身近な存在として大切にされている証だと思います。

お話したいことは、まだまだありますが、とにかくハワイのお寺と人々の信頼と絆は強く、信仰が日常生活の中に深く溶け込んでいます。この様な良好な関係や伝統、文化、習慣がこれからも末永く続いていくことを心から願っております。そしてハワイのお寺から学ぶこともたくさんあるのではないかと思います。

■移民文化史は、光の面と影の部分があると聞いている。移民一世の人々の苦労は、筆舌に尽くしがたいそうだ。それでも現在は、五世・六世の時代になり、かなり欧米社会に溶け込んでいる。外見は「日本人」でも、内面は「アメリカ人」になったということだろう。アメリカ本土では、仏教に対する関心が高く、坐禅やメデイテーションをし、仏教書を愛読する人々も多いそうだ。だが彼らは、お寺には行かない。これは日本と似ている。「仏教は好き」でも、「お寺や坊さんは嫌い」という「悪しき」傾向だ。こうした傾向を生んだのは、ひとえに仏教側だ。日本では「葬式仏教」と揶揄されてきた。これは絶望すべきことでなく、名譽挽回のチャンスと捉えるべきだ。どのように名譽挽回するか。それは民衆の「お役に立つ宗教」になることではない。「役に立つか立たないか」という損得根性の苦からの解放によってなのだ。

住職

◇お知らせ◇

ブロック塀
工事途中の写真



この度、因速寺墓地南側のブロック塀が劣化し、耐震補強のために改修工事を致しました。施工は、御門徒の中央ブロック様にお問い合わせしました。美しく仕上げて頂き、感謝申し上げます。



完成写真



因速寺創建四百記念に際し、稲垣美智子様より高額な篤志寄付を頂戴いたしました。その一部を使わせて頂き、ご本尊前（中尊前）の打敷を新調させて頂きました。（特別な法要の時に飾り致します）

★因速寺 掲示板★

新盆合同法要 兼ご命日の集い

門徒・檀家である無し不問です

7月7日(日)午後3時～(受付午後2時半)

冥加志お一人三千円(高校生以下無料、一家族五名様まで)
『ご命日の集い』ご参加の方は五百円

この一年にお身内を亡くされた方々を追悼し自分自身の人生を振り返るご縁にしていただければ幸いです。お釈迦様は、ひとは病や事故や加齢で亡くなるのではなく、「誕生」が死の根本原因だとおっしゃいます。今回のご縁に仏法に耳を傾け、共に救われていきましょつ。

◇写経の会◇

門徒・檀家である無し不問です

毎月1回 午後1時30分～4時頃まで(お勤め+座談含む)
開催日.. 7月10日(水) 8月はお休み

9月11日(水) 10月9日(水)

教材.. 正信偈、仏説阿弥陀經、仏説無量壽經(上下巻)

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)をします。

お菓子とお茶を飲みながらワイワイ座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。非日常を味わってみませんか?
どなたでも参加可能です。

冥加志.. 初回は三千円(教材費込)

二回目以降五百円



◇フッディ・サロン◇

〔輪読会〕

門徒・檀家である無し不問です

一冊の本をみんなで輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら語らう会です。参加される皆さんは職種も様々、住所も様々、なにも強制されることはありません。様々な本を通してそこに流れているへほんとうくに触れるのが会の趣旨です。
どなたでも参加可能ですので、どうぞご参加下さい。

● 下半期の開催日 午後4時スタート

● 冥加志.. お一人千円 ※遅刻・早退自由です♪

● 日程.. 6月23日(日) 7月28日(日)

8月25日(日) 9月29日(日)



◇ご命日の集い◇

門徒・檀家である無し不問です

毎月のご命日のかたを縁として仏法を聴聞する集いです。
やがて私自身も、この世を去っていきます。

みすみす死ぬのになぜ生きるのか?

人間の根源的な問いに、あなたならどう答えますか?

開催日.. 7月7日(日)兼新盆合同法要午後3時～

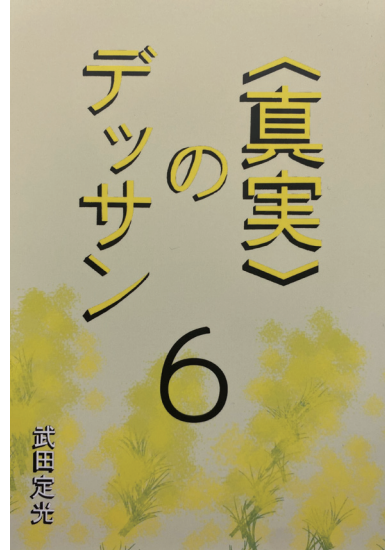
10月27日(日)兼報恩講 午前11時～

内容.. 読経+法話(住職)

冥加志.. 冥加志は各会で異なります。詳細は後日お知らせします。



New!
住職新刊本発売



『＜真実＞のデッサン6』
実費冥加金500円

「やはり「真宗門徒」は、△真実▽に魅入られ、△真実▽に取り憑かれた、イカれた連中に違いない。果たして、この△真実▽は、人間をどこまで道連れにするのだろうか。結論を急げば、「死という思い」が幻想であることを暴き出し、人間は「死がない」と教え、真の自由へと解放するためだ。△真実▽が人間に取り憑くのは、「自分は死なない」というところまで、人間を突き抜けさせるためなのだ。それは「死」のみを幻想として暴くのではない。その裏側にある「生」をも幻想として暴く。我々が体験できるのは、「死という思い、生という思い」であって、「死や生」そのものではない。誰も、「一人称の死」は体験することができないという暁光を与えるために。」(本文抜粋)

◆お知らせ◆

諸物価高騰の折から、この度、講堂にて、会食を希望される方は、「会館使用冥加金」として、1万円を頂戴することとなりました。また、護法会会員以外の方は会食の有無に関わらず御布施とは別途、2万円頂戴いたします。

〈因速寺護法会決算のご報告〉

令和五年度決算

総収入	18,302,572円
(前年度繰り越し金を含む)	
総支出	12,399,397円
次年度へ繰り越し	5,903,175円

令和六年三月三十一日現在

※詳細をご希望の方は、寺務所にお尋ね下さい。

雑言雑語

今月で誕生日を迎えて四十歳になった。今年に入って一月の教区報恩講で初めて痛風を発症し、この記事を書く一週間前も痛風を発症していた。永代経という大きな法要の時が発症二日目、足を引きずりながら出仕をした。私の場合発症の原因は飲酒量が多いことと医者に言われた。特段プリン体の多いものを摂取したものではない。プリン体のおよそ八割は体内で生成され、口から摂取するのは二割だそう。それから自宅では禁酒。外に飲みに行った時だけ飲酒するようにしている。思い返せば、高校生の頃から居酒屋に入り浸りお酒を飲んできたツケが今になって回ってきたのだ。これも業病の至りだろう。これからは運動もするように」と言われたのでジムに申し込んだ。思い返せば、七年前初めて本山の御正忌報恩講に准堂衆補として初参勤した時は今より体重が十キロ以上も軽かった。今年の春の法要に出仕したときは確かに足の重みが違った。痛風を縁にして、初参勤の時の体重に戻そうと一念発起した。まあ、とは言うものの熱しやすく冷めやすい性格の自分がどこまでもつかは分らないが、やるだけやってみようと思う。話は変わるが、最近法事後、少しだけ法話をするようになったのだが、「初めて聴きました。」という反応があった。『法話をするのは故人が仏となった今、法事に遇う縁を下さった。だから救われなければならないのは、ここに集まっている皆様ですよ。でなければ阿弥陀さんが救われません。』というような話だ。法事一回一回が門徒さんにとつては万劫の初事なんだと思いついた。同じ話をしていても無駄なことなど無いのだと阿弥陀さんに励まされた法事だった。私の好きな映画で八年ぐら前に流行った「君の名は」という映画がある。あれは阿弥陀さんの物語だと当時直感した「忘れてはならない大事な名前」それは「南無阿弥陀仏」という名前だったのだ。釋定志

表紙画題

『梅雨の羅網』

武田美輪 (坊守)



『よびぐいえ』一三八号

発行所 因速寺 (真宗大谷派 本山 東本願寺)

〒136-0074 東京都江東区東砂1の4の10

☎(03) 3644-0986 FAX(03)3648-4391

Email info@insokuji.com

HP https://insokuji.com

編集・発行 武田 定光 Takeda Jyunko

発行日二〇二四(令和六)年六月二十九日

Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan